

Ⅶある思い

1代弁

核の冬、全面核戦争が起こると地球は暗雲と放射能を含んだ恐ろしい粉塵に覆われ、太陽の光線も地表に届かず、寒冷で凄惨な世界になってしまうらしい。核の脅威は薄らいではないが、地球にとつてもうひとつ深刻な問題がある。温暖化だ。何でも、温暖化による海水の膨張、北極圏南極圏の氷の溶解などに伴う海面上昇が現状のペースで続けば、「西暦二〇三〇年までに約二十センチメートル、二十一世紀末までには六十五センチメートル上昇」との従来の説を上回る可能性があると予測を、国際環境保護団体グリーンピースが「気候の時限爆弾」と題する報告書で警告した。一九九四年六月のことだ。すでに一九三七年にレイチエル・カースンは地球温暖化に言及していた。さらにIPCC（気候変動に関する政府間パネル）は、温暖化が進めば、北極南極・グリーンランドの氷が溶け海面は八十センチメートルも上昇し、やがては太平洋の島国はすべて海中に没し、日本もあらかた沈んでしまうと言われる。

。温暖化の元凶二酸化炭素が益々増えれば海水が酸性化して、サンゴの骨格や貝殻を作る炭酸カルシウムが出来にくくなる。すでに北極海域で貝に影響がでているとの研究報告がある。将来貝も食べられなくなるのだろうか。

さらに予測不能な気候変動もある。昨今世界で起きている氷河の溶解・山火事・台風（サクロン）・大雨などが報道されている。

いま本当に地球は厳しい状況にある。

……冗談じゃねえ。だいたいだよ、核の脅威とか温暖化とかなんてえことは、先進国と手前勝手にいう国の連中が起こしたものではねえのかい。温暖化の原因なんかは、発展とか開発とかいって、エネルギーをとさき考えないで無茶苦茶使ったからではねえのかい。

そりゃ、科学技術つてえもののおかげで、わたしの島も電気がついて暮らし向きはよくなったよ。ただだよ、ものには程度つてえものもあるんじゃないのかい。海の水が増えれば、わたしの地べたが真っ先になくなってしまふんだ。お前さんわかるかい。島も人も作物も家畜もみーんな海に吞まれてしまふんだ。天変

地異？　すべて神様の思し召しとは、どう考えても思えねえ……。

こんな呻きが聞こえてきそうだ。

南海の島々には、日の出とともに起き、日の入りとともに寝て、ささやかな畑でタロイモを作り、豚や鶏を飼い、椰子を飲み、必要なだけの魚を捕って生活する人々がまだまだいる。南の島に限らずこの地球には自然のサイクルの中で、ごく自然に生きる人々がたくさんいる。ミクロネシア、アンデス、ヒマラヤ、アフリカ、北極圏の旅すがら見てきた。おそらくこれらの人々は、核の冬とか温暖化とかの言葉すら知らないだろうし、ましてそれによる異変なんかは、夢の中ですら想ってもいないだろう。そんな人達が、一部の人間が起すとしても厄災によって、命と暮らす土地を奪われることになったら、こんな理不尽なことはない。文明という美名の裏側には未開非文明の人々の生存まで、じわりじわりと脅かしている。彼らが遅れている、悪いとは決していえない。それぞれの生活文化の中で慎ましく生きている。

文明や時代の加護で、いま南国の海に遊んでいる。

自己に矛盾を抱えながらも、彼らの声なき声を少しは代弁しておかねばならない。肌を撫でる心地よい風が、そうさせた。

2 立腹

ネス湖でのことである。もう五四十年近くたっても消えない怨みがある。“ネツシーを捕まえる”この冗談ともいえる行いに、探検隊と称して大挙して行ったのだから世界のあっちこつちから取材陣がきた。対象が虚構であつても、世間が考えているような面白半分で活動しているわけでもないので取材は歓迎しないのだが、イギリスはもちろん日本やアメリカから多くの新聞や雑誌の取材がきた。地元紙は温かく見守ってくれていたし、日本の新聞記者も「がんばって」と激励してくれた。

これに比べ、アメリカの有名な某男性雑誌はひどかった。潜水探索も佳境に入ってきたある日、アークハート湾で潜水中、彼らは小舟を操り、われらの船ローリンに勝手に上がりこみ、イギリスのどこかで雇ったダイバー（？）に、ぼくの水中カメラを持たせて潜らせたのだ。シーマンシップのかけらもない連中とムカつときたけど、してまったことは仕方がないとしたが、

何とそのダイバー（？）は大事なカメラを湖に落としていたのだ。

船に上がると、テレビドラマに出てくるようなスマートな男性記者とキャリア然とした美人記者が何やらいいながら寄ってきた。そばには貧相なウエットスーツを着たダイバー（？）がうつむいている。そして記者たちは何やら、まくしたてるようにしゃべっている。通訳がいないので何をいつているのかすぐには分からなかったけど、ダイバー（？）がカメラをなくしたことはわかった。詫びているのだろうが、態度がデカクそんな殊勝な姿には見えない。

いくら謝られても「はい、そうですか」というわけにはいかない。

頭にきて「ふざけるな！ 拾ってこい！」と怒鳴り潜るジェスチャーをしたら、ウエットスーツの者はタンクを背負ってアタフタと飛び込んだが、水面をバタバタ、オタオタしているだけでいっこうに潜らない。潜らないでなく潜れないのだ。それもそうで、真つ暗な湖の中にそう簡単に潜れるわけがない。この湖に潜るには相当な覚悟があるのだ。それ以前に「ほんとうにダイバーなのかよ？」といった有様なのだ。これじゃあカメラを落とすのも無理はない。だからといって

許すわけにはいかない。「もう勘弁してよ」という顔つきで、ひつきりなしにこつちを見る。溺れたら助ければいい、お仕置きと思えでしばらく放っておいた。

場を移して。

この連中、反省もなく謝る気配もなく、まったく責任を取ろうとしない。ふたりの記者は「落としたのはこいつだから」、ダイバー（？）は「記者に命じられたのだから」と責任をなすり合っている。埒があかない。「じゃ、俺たちやどうなるの、いちばん大切なカメラをなくされたんだよ、活動に差し障りがあるんだよ、何とかしてよ」といつてもまったたく意に介さない。

ぼくは「日本からすぐ取り寄せるから、代金をおいてってくれ」これでおさまると思っていたが、「いや、金がない」という。じゃ、どうするのかと訊くと、ぼくには分からない英語をまくしたてる。どうやら、会社での自分の立場が悪くなってしまう、と言っているという。そんなことこつちには関係ないと返すが、ただそれらしきこといつているだけだという。そのうえ自腹を切る度胸もなさそうなのである。ボランティアで現地参加してくれた我が方の通訳も彼らの態度にあきれかえって通訳のトーンも下がってしまった。

延々とスタタモンダの末、ロンドンで同型のカメラを探してすぐ送る、ということになった。だが、離れてしまえばハイこれまでで、送るところか連絡もない。この連中、どう考えても、オチャカラカシ気分であたようにしか思えない。「人のことなんか、いえねーだろ。お前さんたちのことを日本では、蛸の糞で頭にする、というのだよ」、目の前にいれればいいってやりたい。

あのカメラは、こつこつお金を貯めてやつと買うことができたニコノスⅡなのだ。苦労して手に入れたもの、初めて買ったものなどは、だれでも愛着があるだろう。そういうものを見ず知らずの者が勝手に使い、なくしたとなれば怒り心頭は当然だ。あの場面を思い出すと、今でも腹が煮え繰り返る。「汝、許せよ」がキリスト様の教えだろうが、そうはいかない。この恨み、彼岸の彼方まで持っていき末代まで呪ってやる。

3 忘却の彼方へ

町を歩いていると、いつの間にか新しいビルディングが建ち、顔見知りの人の家がなくなつて空き地になつていたり、繁華街あたりは道路が広がり、馴染みで

はないが鼻肩の店がなくなつていたりする。七十年も同じところに住んでいると、感覚が麻痺して鈍感になつているせいか、町の変貌に気がつかないものである。それで意識して歩くと、あちらこちらの変化が目に入ってくる。子どもどものときからなにげに見上げていた大木などがなくなつていけば、時の流れをあらためて知ることになる。

海でも同じようなことがある。ぼくのダイビングはほとんどが伊豆半島周辺の海で、同じポイントに幾度となく潜つてもその日その時の趣があるものの、やっぱり慣れてしまっているせいか海中の変化に疎くなつていたようだ。それでも新聞やテレビでなにかしらの語句によつて、ハッと目覚めることがある。

それは磯焼。

そういえば、たしかここらにはアラメやカジメがいっぱいあったはずだ、と記憶がよみがえる。磯焼けというキーワードを頭において潜っていると、あちらこちらの海で目にする。アラメやカジメがまったくなくなつていたり、岩壁に棲息するイソギンチャクやフジツボなどがすっかりなくなつて白ちゃけた岩肌をあらわにしていたり、目につくようになり、ここも、ここもだ、あつちにも、とやたら気になつてくる。

磯焼けの原因は諸説あつて簡単ではないけど、一時的な現象もあつて磯が回復することもある。しかし最近では慢性的で地域的な個別の原因にさらに海水温の上昇が追い討ちをかけているとのことだ。もう十五年くらい前だが北海道の焼尻島や積丹の海にも潜ってみたけど、海藻はまったくみられず白々しく寂しい海中だった。さまざまな要因が重なつて磯焼けが起るが、こゝも回復しないとなれば相当前から海水温はジワリ上昇していたのではなからうか。

南に世界に冠たる珊瑚礁をもち、中緯度から北は海藻類が繁茂し、黒潮親潮があらう列島日本は、海からの恵みを最も受けている国である。この豊穡な海を保つてきたのは珊瑚礁であり沿岸に繁る海藻類なのだ。海に潜れば、その珊瑚も海藻類も衰退しているように見えるのである。ダイバーの潜る範囲なんて、海の大さき深さから比べれば針の穴よりはるかに小さい。この小さいものから全体をいい切ることとはできないけれど、日本の沿岸は病んでいると感じる。素粒子から宇宙をマイクロからマクロを想像するように、ダイバーの小さな目からでも海の変化を推測してもいい。ダイバーのひとりとして珊瑚や海藻類の衰退を報告し

ておきたい。

海の生物生産力の原点は、磯や渚からつづく太陽光が差し込む比較的水深の浅い海域だ。工業立国の日本は工業地帯を必然的に海に面したところに建設し、津波や高潮の被害を防ぐために海岸はコンクリートで囲い、人為的に海と陸とを隔絶し磯も渚も消してきた。またあらゆる河川にダムを作り、山や森林の恵みを海に運ばせることも阻害してきた。これらも磯焼けの原因だ。海水温の上昇、森林の荒廃、河川の人工化、トリプルパンチで日本の沿岸の自然はこの先いつたいどうなつてしまうのだろうか。そのうえ最近では原発事故だ。ますます深刻になつてくる。

磯や渚の消失は、経済の発展や防災の面からすれば仕方がなかったことだろうけど、もともと日本人は自然に順応調和して詩情豊かに暮らしてきた民族だ。自然に対する畏敬の念というか、自然観というか、そういった感覚をなくしてしまつてるといわれて久しい。

磯や渚は日本人の生活に深くかかわってきた。潮の干満で現れたり隠れたりする磯や渚は、海岸地域に住む人々の心と海と陸とをつなぐところだった。磯や渚

は自然の恵みをもたらし、自然の畏れを知るところで、はるか向こうの海に死者の赴くところがあり、海の彼方から新しい命がやってくるという、心のよりどころでもあった。海に面する地方では、いまでも自然を崇めおそれる祭祀が伝承され、海岸には墓や産小屋などの名残を見ることができるといふ。『浜辺の歌』や『知床旅情』などの诗情豊かな歌詞と旋律は、コンクリートに囲まれた町にいても、遠くなった日本の海辺の風景やそこにいた人々心情に誘ってくれる。四面海に囲まれて暮らす我らの豊かでしなやかな心の働きは、磯や渚から切っても切れない縁にあると聞かされるのだが、磯や渚とともにいずれ忘却の彼方へと消え去ってしまうのだろうか。

4 仮説

……人が死ぬと、ながーい穴を抜けて向こうの世界へ行くんだよ。穴を出た所はとても綺麗なところなんだよ。でも悪いことをすると、そこへは行けないんだよ……。子供の頃、田舎の婆さんの怪談に聞いた話しは忘れない。悪いことをした人は別として、婆さんの話しはあながち嘘ではないような気がする。

ぼくの体験と違うけれど、トンネル型臨死体験した人達が見たその様子は、潜って水面を見あげたときの視覚的情景に重なる。視線延長線上の水面だけが、丸く白く透明な色光で明るく、周囲は暗い。これは、太陽光線が水面で反射されたり、水が波長の長い光の成分から吸収したりしておこる光の減衰という光学的現象で説明できる。でも見た目では「光と陰のトンネル」といいあてられる、と思うのである。

また臨死体験者は、トンネルを抜けると光輝くところに出て、気持よく心がとても安堵した、こんな心身感覚も語っている。潜って浮上したときの感覚は、光と陰のトンネルを通り、水面に出たときの明るさ、暖かさ、安堵感は、臨死体験した人々と同じではないかと想像する。特に透明度が悪い水中でのしんどい潜水で、無事水面に還ったときなど、一層そう思うのである。

生から死のプロセスや死後の世界、本当のところは分からないし、分かりやうがないのだが、臨死体験者は、皆どうして同じようなことをいうのだろうか、こんな疑問もわいてきた。あれこれ考えた末、結論は「原始記憶の蘇り」というところになった。

生命は海を起源とする。古生代シルリア紀を過ぎると、生命は海から陸に進出しはじめた。陸は苔やシダが繁茂したうっそうとした世界だったらしいが、少なくとも水の中よりずっと明るかったはずだ。生命は、水から出たところの新世界を目指して、次から次へと屍をこえて目指したのだろう。何億年も続いた苦難の旅に、いつも見えていたものは、光と陰のトンネルだったに違いない。これが陸上に到達した生物のDNAに焼きついた。まず、これがひとつ目。

山や海をやっていたせいとか、人の臨終に居たり、死者と対面したりした経験は多いほうだろう。強烈な事故で破壊され、生前を全くしのばせない者もいたけど、だいたいは平穏な表情になっている。筋肉が弛緩するので、穏やかな顔つきになると説明されるが、これは外部の者の見解で、死者の内部で何がおきているのか、知ることなどできない。この内部の様子は、臨死体験者だけが語れることだが、トンネル型臨死体験から察すれば、息を引き取る際の「苦悶の表情」はトンネル通過中で、「穏やかな顔つき」は抜け出たときの安堵の境地ではないかと思うのである。これがふたつ目。

ひとつ目の視覚的理由、ふたつ目の心身的理由をもって、トンネル型臨死体験の情景と、潜って水面を見上げたときの光景は似ていると、さらに納得するのである。ちょうど紙の束を焼いたとき、表面から一枚ずつ焼失して行くように、死に際して脳も新しい記憶から消失して行って、脳のいちばん奥にとめおかれた原始記憶が、死に臨んでよみがえるのではないのだろうか。

視覚的・心理的感覚とぼくの葬式仏教徒的死感からみれば、光と陰のトンネルの苦役が黄泉への旅路、光輝く所が浄土、ということになる。

だったら臨死体験者は、みんな脳細胞がこわれて記憶喪失になってしまうはずなのだが、そうにはなっていない。やや苦しい言いようになるが、あくまでも体験なのだから、何かの理由で脳の情報伝達回路が短絡して、原始記憶が先に蘇ってしまったのだろう。

分かったような、分からないような、ごたくをくどくどと並べたけれど、言いたいことは、トンネル型臨死体験談と、ダイバーとしてのぼくが、水面を見たとき、水面に還ったときの状態が、視覚的にも心身感覚的にもよく似ている、ただ、それだけなのである。

人間は、陸上動物として進化してきたのだから、思考基盤は陸にある。ダイバーも人間だから、もちろんである。でも、もう少し考えを進めると、ダイバーの行動経路は「陸から海に潜って、陸に還る」である。ダイバーは「陸から海へ」の陸的思考部分を、意識的に切り離せるのではないか。原始生命に思考能力があったかどうか分らないけど、「海中から陸へ」という原始生命的思考や感覚を養うことは、ダイバーならできるのでないか、と思うのである。

世界は広いと言えても、この「海中的なるもの」に根ざした思考を展開できるのは、唯一、潜れる者すなわちダイバーだけなのだ、と気取りたいのである。

ぼくは単純に、ダイバーだけが持てるであろう原始生命的思考や感覚で、臨死体験トンネル現象に想いを巡らしてみただけのことなのである。

原始記憶の蘇り、あながち間違っているとは思わない。住む土地も、肌も、目も、毛髪の色も違う西欧人も日本人も、臨死体験についてだいたい同じことをいう。その理由は、「生命の誕生は海」という根元的共通項にくくられる。

15世紀のオランダの画家ヒエロニムス・ボスの「幸福への上昇」という作品は、正にトンネル型死出の旅路の情景にそっくりである。そのうえ題名に「上昇」とつけられている。「上昇イコールアセント」、アセントは潜水用語で浮上にあたる。

そしてまた、人類の遠い祖先（原始的な哺乳類）は恐竜から逃げまどい、その恐ろしい記憶が今でも残っていて、大半の人はその末裔の蛇やトカゲなどの爬虫類を怖がるのだと聞いている。シルリア紀からずっと後のジュラ紀から白亜紀あたりのことだが、人間の時間からすれば、これももう原始記憶のうちである。

光と陰のトンネルの記憶。もっと確かな証拠があった。

人間の血液のナトリウム・カリウム・カルシウム・マグネシウムなどの元素の比は、海水のそれと変わらない、ということだ。

私たちの身体のなかには海が宿っている。

6とどかぬ領域

ずっと気になっっていることがある。それは、宣伝によく使われたり、ダイビングにハマッテいる人が口に

したりする「ダイビングは、母親の胎内で羊水に浮いていたときの無重量感覚を味わえる」という文句である。

ぼくは潜水歴が決して短いわけではないが、この感覚を実感したことはない。これはどうしてか。ぼくは母親の胎内にいたとき、羊水に浮いていたときの無重量感覚を覚えていないからだ。だから水中に浮いている、つまり完璧な中性浮力を得ていても、この状態が羊水中に浮いていたときの無重量感覚とはどうしても言えない。反対に、この完璧な中性浮力状態感覚が羊水中に浮いていたときと同じだ、ともいえない。

また、「ダイビングは日常のストレスから開放される」という文句も気になる。ダイビング中にストレスから開放された経験もない。確かに潜れば日常の憂鬱は忘れていく。でもストレスから開放されているとは思えない。

ダイビング指導書には、「水中ではリラックスせよ」と書いている。人間にとって非生存圏お水中は、もともとストレスを与えるところなのである。なにしろ水の中である。外敵からあるいは自分の気持や体の変調がいつ起こるかも知れない。リラックスしてストレスから開放されるなんてとても無理だ。まして、羊水中

浮いて何も考えずという状態がリラックスでストレスからの開放というならば、残念ながらその記憶がないから、なんともいえない。

潜水、もともと内的外的に危険危機のある行為だから、いつも「何かあったら」

の緊張感がある。これが潜水のストレスで、潜ったからといってストレスオールゼロといかないと思うのだが間違っているのだろうか。

本当にリラックスしたり、ストレスを解消できたりするのは、潜りを終えて陸

やボートに上がったときや、ダイビング旅行で何もしないでトロピカルドリンクでも飲みながら海の風景でも眺めているときなどで、これは単なるリゾート滞在や温泉旅行と変わらない。だから、これらの文句をすんなりと理解できないのである。

このふたつの文句を何の疑念もなく、よどみなく言えるのは、きっと「達人の域」に到達した人に違いない。ぼくには永遠に到達できそうもない未知の領域なのである。

7 真夏の夜の談義から

M先生とぼくは、ビール大ジョッキ五杯目を待っています。先生と飲めば八重山の海と島の話が常で、ボーイに閉店を告げられるまでビールと話は終わりになりません。この時間は、ぼくの真夏の夜の楽しみなのです。

五杯目のジョッキも半ばになったころ先生は、「人間死んだらそのまま海に沈めたらどうか、人間の肉体を資源として活用したらどうか」と他人が聞いたらドキッとするようなことをいいました。なんと過激な発言かしら?……。

妙にこの発言が引つかかっていたので、ぼくなり先生先生の発言について考察してみることにしました。

日本とイギリスは、死んだ人の処理は百パーセント近く火葬です。国によっては一部火葬をするところもあります。ほとんどが土葬、水葬、鳥葬、風葬などで遺体は自然の摂理にまかせています。だから世界からみれば、火葬は特殊な方法といえます。まあ、日本もイギリスも周りが海で国土が狭いといった事情かも知れません。まずこれを念頭において。

動物は、食べなければ生きていきません。海にたとえれば、海面に降り注ぐ太陽光線（太陽エネルギー）によって植物性プランクトンが発生し、それを動物プランクトンが食べて増殖し、それを小魚が餌とし、またそれを中型の魚が食べ、さらにそれを大型の魚が食べていきます。そしてそれぞれの段階で生じた魚の排泄物や死骸は、微生物によって分解されて海水に溶け植物プランクトンの栄養に戻っていきます。実際には、それぞれの卵や稚魚は大型中型小型の魚の区別なく食べられるので、上位に向かう単純な一本の線ではありません。これが食物連鎖と循環です。この作用によって海の生物は、全体として種の保存をしてきたのです。この連鎖と循環に陸上動物の人間が食糧確保のために割って入ったのですから、魚たちにとってはまったものではないはず。つまり人間が大量の漁獲をすることによって、魚たちが維持してきた生態系を知らず知らずに壊してきたのです。

人間もいずれば死をむかえます。日本人は死者を火葬にします。燃やして残るものといえば、遺骨と遺灰くらいで、骨壺に入れば直接動植物の栄養になります。生物全体としての種の保存の立場からいえば、火葬という儀式は生物界の食物連鎖と循環を断ち切つ

ているといえます。

日本人は昔から動物蛋白源として魚を食べ、かつては漁獲高世界一の水産国と誇り、海産物の一番の消費国といい気になっていますが、実のところ海の食物連鎖と循環を断ち切ってきた張本人だったのでないか、また火葬の国ですから海においても陸においても食物連鎖と循環に関与してこなかった、と考えるのです。

ニシンはもとより最近ではイワシ、サバといった大衆魚まで捕れなくなっています。一口に不漁だといっているだけでは、済まされなくなってきました。日本の人口は一億三千万人余、人口の減少傾向にありますが、いま地球上の人間は六十七億人くらいです。一九六〇年頃はほぼ三十億人でしたから約五十年間で倍以上になりました。爆発的な地球人口の増加です。このままていくと二十年後に

は八十三億人となり、陸上から人がこぼれ落ちるといった笑えない状態になるかも知れません。こうなる台海でも陸でも生産される食品が足りなくなるのは当然で食糧争奪戦が激しくなり、更に海の生き物の食物連鎖と循環を断ち切ることに拍車がかかってしまう

ことになりかねません。

日本人は一生のうちで五十トン位の食物を食べるそうです。五十トンといわれてもすぐにはピンとこないのですが、象十頭分、体長十一〜十八メートルのマッコウクジラ一頭分に相当します。このうち六パーセントつまり三トン位が魚です。たった三トンと思われるかも知れませんが、一億人余りの口を永続的に賄うにはたいへんな量だと容易に推測されます。日本の養殖・栽培漁業は誇れるmのであり今や生産量は漁獲量を上回りましたが、養殖・栽培漁業も所詮海の自然生産力が頼りなのです。

このような視点から自前の食料生産量を上げるため、日本人も海の食物連鎖と循環に直接参加し、死者の肉体をそのまま海に沈めればすぐに海の生物たちの餌となり、微生物に分解され何がしかの栄養となり、海の自然生産力に貢献できるのではないかと、先生は生命とは、生命の連関とは、という根源的な命題つまり食物連鎖の立場から言ったのではないかと思うのです。

日本人の年間死者数は百万人前後です。約半分の五十万人を沈めたとしても、一人の体重五十キログラ

ムとすれば、二万五千トンもの餌を提供できます。自然界の摂理にまかせ、多様な魚種の保全と増殖が実現できるかも知れません。

死者の尊厳、日本人の死生観、法律、社会通念などからみれば、「とんでもねえ、馬鹿いうな」といわれそうですが、ぼくはあくまでもダイバーとしての「海中的なる者の思考」から、人間も自然界の一部ですから生物界全体の連鎖と循環を思い描いてみたのです。

魚の群泳をナブラといいます。陸上から見ると限り海面下は無尽蔵に魚がいると思っっている向きも多いでしょう。でも海に潜ってナブラを目の当たりにすることは稀なのです。広く深い海のことですから、ダイバーがチョコツと潜ったくらいじゃ当たり前かも知れませんが、根付きの魚も回遊魚も無尽蔵にいるとはとても思えません。「おーい、日本人たちよ、お前さんも生命の連鎖と循環に参加しないと、そのうち魚も食べられなくなっちゃうぞ」と、魚自身がいつているような気にもなります。

ぼくは、死んだらそのまま海に沈められることはいっこうにかまいません。魚好きでたぶん他人様より多く魚を食べてきたのですから、少しはお返しをしたい

気持ちがあるからです。でもあまり浅いところに沈められるのはごめんです。潮の流れや波で浜にでも打ち上げられたら、それこそ何だかんだと警察に面倒をかけるかも知れないからです。水深百メートルあたりの大陸棚が妥当だと思います。ここなら役に立てそうです。そしていつの日か海底墓地なるものができて、回忌には深海艇でお参りできるようになれば、海に潜らない人も海が持つ立体的な偉大さを直截感じとってもらえるのではないのだろうかと思うのです。

レイチェル・カーソン（アメリカの女性科学者）は著書『われらをめぐる海』でいいます。

「大陸そのものも浸蝕された陸地の一粒また一粒という形で、海へと溶解し、消えゆく。海から立ち去った雨もふたたび河川へと帰る。その神秘的な過去の時代に、海は定からぬ生命の起源のすべてを内包し、そうしてさまざまに姿を変えた跡に、ついには同じ生命の骸をも受け入れてゆく。すべてこの世にあるものは、最後には海へ、あたかも永遠に流れのように、ものご始まりであるとともに終わりである海洋のかの川、かのオケアヌスへと帰ってゆくのである」と。

死者を海に還す海中葬。これこそが生物界いや自然

界の一員である人間の、真の海への回帰であり、輪廻転生の姿ではないのだろうか、との結論になりました。

8 間合い

ここは伊豆のある海辺、ぼくの秘密の潜水地のひとつだったところです。今では伊豆半島ぐるり一周ダイビングスポットになっています。それまでは限られたところしかありませんでした。休日となれば、あちらこちらからお客さんを連れたインストラクターがやってきました。もちろんぼくも同業者なので、顔見知りのインストラクターやそうでないインストラクターと同じ海域で仕事をしなければなりません。ただそれだけならいいのですが、急に話しかけられたり、無言でこつちを窺っていたりするのです。

こういう煩わしさがあるので、自分専用つまりマイスポットを西伊豆と東伊豆に一区所ずつ決めました。そのひとつが西伊豆田子で、もうひとつは東伊豆ですが場所は明かせません。その理由は水産試験場の実験海域となり、もうぼくも潜ることができなくなっているからです。

久しぶりに定宿としていた民宿を訪れました。まだ

小学校にも上がっていなかった娘さんがすでにお母さんになり、歳月の過ぎゆくさまを感じたものです。ここは国道からに四百メートルくらい入ったところの海辺に面して、数軒の家しかなくとても静かなところ。民宿から海までは本当に近く、数十歩もいけば小さな船上げ場の波打ちぎわです。潮騒と微風もなつかしく遠い日のことを思い出しています。

貼りかえられた真つ白な障子は、電灯を消しても夜明かりになお白く余韻を残しています。ぼんやりとした部屋に波と庭の木立の葉がやけに騒がしく、明日の天気は大丈夫だろうか、潜れるだろうか、天気予報をもっと吟味してスポットを選択すればよかったのではないか、仲間はずれとできるだろうか、駄目だったときのいい訳を考えたり、好天の日と違ってさまざま不安が、とめどなく湧き上がったりします。仲間とは、ぼくのお客さんのことでダイビングツアーに参加し、ダイビングを楽しみにしている人たちのことです。厳密には仲間とはいえないので余計に心配になります。

案の定、翌朝は荒れ模様。波は岩礁で砕け泡立ち、国道下のゴロタ浜にも波が不気味な生き物のよう

這い上がっています。向かい風でとても潜れません。そこで、ぼくは思案します。でも答えはふたつしかありません。このまま帰るか、ダイビングスポットを変えるかです。仲間は、せつかくだから場所を変えても潜りたい……の顔で、ぼくも立場上ダイビングさせなければならぬ、というわけで答えは後者になります。急ぎ宿を引き払い西へと移動します。時間のロスもあって半日分のダイビングとなりますが、仲間は潜れたことで一応満足し、ぼくも十分ではないけど職責を果たしたと安堵します。でもこんな日のダイビングは、西へまわったとはいえ、波で海底の砂はまい上がり、身体は振られ決して快適とはいえません。

何度となくこんなことがありました。帰ることもなく西へ移動することもなく、宿の廊下で紅茶をたしなみながら、それぞれに想いをめぐらしたり、ダイビング談義でもしたりしていたほうが、よかったのではないかと思ったりもしています。

物事には「間合い」があります。とくに日本の「道」のつく行いのほとんどが、間合いが大切だとしていきます。仲間たちの次の海行きは、一週間先、一ヶ月先あるいはもっと先になるか知れませんが、ぼくはこの期間も間合いじゃないかと思うのです。

昨今、無制限ダイビングといつて、一日にタンク何本でも潜れると喧伝されています。ダイビングコンピューターの普及が理由だと想いますが、これはまずいと考えます。チャンスがあればたくさん潜りたいのも人情ですが、そうでなく、その時その海をとりまく現象とダイビングの関連を考えたり、風の匂いを感じたり、地元の人々の生活や海との係わり合いを聞いたりするほうが、もっとダイビングの楽しさに幅をもたせることができると思うのです。

ぼくは素もぐりで一分も潜っていられませんが、スキューバならば浅いところならば一時間以上、つまり六十倍もの時間潜っていられます。ここにスキューバの可能性を見出しているのです。「潜水は物理的に圧力空間の上下移動」なので減圧症予防の面から一日の潜水時間は限度があり、複数回の潜水を行う場合は、次の潜水に備えて体内に溶けた窒素を体外に排出するためにガス圧減少時間（休憩時間）というものが設定されています。これからしても潜水と潜水の間の時間を「間合い」と言えるでしょう。

潜水と潜水の間、海行きと海行きの間、北アルプスの開拓者百瀬慎太郎の言葉を借りて代えれば「陸に在って海を想う」、この態度が大切なことだったので

す。『ドビュッシーは交響曲『海』を作曲するとき、から遠い内陸で海をイメージしながら……』、とレイチェル・カーソンが言っています。洋の東西に関わらず人の心に沈潜する想いは同じです。時間も距離も少し置いたほうが思考を巡らせることができるのです。きょうの海は穏やか。久しぶりにきたマイスポットの夕暮れに、あれこれと想いを巡らせています。この時間が間合いなのでしょうか。気分も穏やか、いい時間を過ごしています。

【注・用語解説】

・漁業権……漁獲行為の排他性をいい、漁業者に与えられた権利。

・シャローブランクアウト……素潜り（息こらえ潜水）で息が苦しいのに我慢して潜り続けたり、深く潜ったりしてから浮上すると水面近くで突然意識がなくなることをいう。長く息を堪えたり深く潜れるようになったりできるダイバーが陥りやすい。

・ガス圧減少時間（休憩時間）……潜水すると呼吸する空気の窒素が体内に溶け込む。潜水後溶け込んだ窒素はすぐには排出されず、普段の体内の窒素量に戻るまでは相当の時間を要する。連続した潜水する場合、十分時間をおいても、まだ抜け切っていない窒素量をこれから潜水しようとする深度に対して、すでに潜ったことにする時間に換算しなければならぬ。次の実際の潜水時間を決めるのに必要な潜水と潜水の間の時間をいう。